

2021 年度 個人研究実績・成果報告書

2022 年 4 月 9 日

所属	商経学部	職名	教授	氏名	田野 宏
研究課題	近代日本における野菜の新品種導入過程と主産地形成に関する研究				
研究キーワード	輸送園芸、タマネギ、春播 き秋収穫、北海道、在来種	当年度計画に対す る達成度	2.順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が達成できた		
関連するSDGs項目	9. 産業と技術革新の基盤をつくろう	該当なし	該当なし	該当なし	
<p>1. 研究成果の概要</p> <p>本研究は、近代日本における地域固有の在来品種を基にした野菜の産地化が、昭和・平成以降の現代日本の輸送園芸産地の形成と存在形態にどのような関わりを持って産地化の礎を築いたのかを、生産者のサイドから実態調査を通じて農業地理学の視点から明らかにしようとした。具体的には、現代日本の代表的な外来野菜の一つのタマネギを取り上げ、その生産の 50%を超える北海道に注目した。そして現代の主産地化が行われる以前の明治～昭和戦前期において札幌を中心に外来野菜としてのタマネギがどのようにして地域に受け入れられて、主産地化の素地を形成したのかを北海道開拓使、入植農民との関わりから述べると共に、その伝播過程を明らかにした。北海道産タマネギ栽培の嚆矢となった開拓農民と開拓村について詳細なデータ分析を行った結果、作付の伝播に関しては篤農家による栽培技術の蓄積に負うところが多いものの、その市場販売の過程は仲買商人の存在が大きく、また、栽培に好適な土壌としての自然堤防上に立地が集中していたことが明らかとなった。また、近代期の農法は現代期の作付形態と比較して、極めて労働集約的なものではあったが、アメリカから導入されたイエローグローブダンバースという品種を国内産地用に改良し、現代の F1 品種の基となる札幌黄と呼ばれる品種が完成したことによって、全国に出荷する素地を本格的に作って行ったことが明らかとなった。</p> <p>2. 著書・論文・学会発表等（査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載）</p> <p>【論文（査読あり）】</p> <p>【著書・論文（査読なし）】</p> <p>日本の近代期における外来野菜の導入過程と主産地形成との関わり（I） —北海道のタマネギ生産地域を事例にして— 田野 宏（単著）千葉商大紀要 第 59 巻 3 号 53 ページから 70 ページ 2022 年</p> <p>【学会発表等】</p> <p>なし</p> <p>3. 主な経費</p> <p>研究動向を調べるための、学会費、北海道を中心とする農業の統計資料収集、文具代等の経費を個人研究費で利用した。現地調査の費用は、コロナ禍のために使用することがなかった。</p> <p>4. その他の特筆すべき事項（表彰、研究資金の受入状況等）</p> <p>特になし</p>					

(本文は2ページ以内にまとめること)